2022年4月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第543号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

矢島渚男著『虚子点描』発刊にあたって

俳句界の大樹ともいえる高浜虚子について深く考察した一書

文・紅書房（べに）　代表　菊池洋子

矢島渚男（なぎさお）著『虚子点描』が出来上がった。若いころから俳壇で注目されていた著者は87歳になった現在も読売新聞俳壇の選者として、また月刊の主宰誌「梟」の選句や執筆を続け、時々プールで泳がれるというご活躍ぶりだ。その著者が、俳句界の大樹ともいえる高浜虚子について深く考察した一書である。7年間以上連載した「梟」では毎号ほぼ1句1篇の形であったが、それをこのたび虚子の作句年順に並べ替え、そこに時代的背景や史実、人々との交流などを加え、長命であった虚子の生涯をたどりながらそれぞれの俳句が鑑賞できる構成に組み替えて集大成された。

虚子に関する書籍はすでに数あるが、本書の斬新さや独自性についてお話していきたい。俳句にあまり関心がない方でも、司馬遼太郎の『坂の上の雲』に登場した人物としてご記憶されている方はいらっしゃるのではなかろうか。どうぞお付き合いのほどお願いします。

高浜虚子像　鎌倉市馬場ヶ谷にて。昭和15年9月27日　日本近代文学館提供

＊

『虚子点描』矢島渚男著／紅書房刊／四六判・256頁・202201刊／定価（本体2200円＋税）／ISBN9784893813497

虚子の出生

1874（明治7）年2月、愛媛県松山市で池内清（後の高浜虚子）が誕生。父池内政忠48歳、母柳（りゅう）50歳（いずれも数え年）、3人の兄の下に生まれる。すぐ上の兄と14歳も離れていて、虚子は一家のペットのようであったと記される。

そして清8歳の時、祖母池内峯が亡くなったことにより祖母方の実家高浜家が断絶するので急ぎ末の孫の清が、住む家はそのままに高浜姓を継いだという。それにより虚子の本名は「高浜清」となる。「虚子」の号はのちに正岡子規につけて貰うのだが、この高浜姓になったことも、「池内」にはない、彼方を睥睨しているかの悠揚たる感じで、後世名を残す俳人としてよき改姓だったと著者は語る。

河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）と正岡子規との出会い

虚子は厳格な父の影響もあってか勉強もよくし、仲間から「聖人」と呼ばれていたそうだ。伊予尋常中学校で同じく俳人として後世に名を残す河東碧梧桐と同級になり、7歳上の碧梧桐の兄と同級の正岡子規を知る。この二人との出会いがなければ俳人虚子はなかったであろうと著者は記す。夏休みに松山に帰省していた子規から俳句熱を煽られ、句作を始めたのが17歳のとき、子規から、本名の音をとって「虚子」という号を授けられる。以降の子規と虚子の文通から、お互いに心を許し敬い、信頼し合う様子がくみ取れる。虚子は小説家になりたい望みを抱いていたが、「文学者になりたいのならその近道としてまずは俳句を修練するように」と子規から諭され、その忠告に素直に従った。尋常中学校を卒業し、京都の第三高等中学校に入学、翌年碧梧桐も入学し下宿に同居する。碧梧桐は自由律の俳句で名高いが、このころは写実句を作り、それに対して虚子は主観句の傾向であったという。後年の作風から見れば意外なこととともいえる。

「**春雨の衣桁に重し恋衣**」明治27年虚子20歳の作。しっとりとした情が複雑に籠る句から、「聖人」は京都で変貌したと読み取るのだ。明治時代は徴兵制があったが、虚子は20歳の時には本籍を沖縄に移し免れていたという。昭和期の時のように忌避すれば投獄されるというようなことはなく、当時は種々の免除制度があり、漱石もそうであるように徴兵されずにすんだ人も多かったそうだ。

京都での同宿生活間もなく、虚子と碧梧桐は学制改革により仙台の二高に移されるが、結局一か月もたたずに共に退学し、上京。そして二人の放蕩生活が始まり、子規がこ

の事態を心配する様子も記される。

虚子の結婚

「**うち並びて鏡にむかふ更衣**」1897（明治30）年のこの句には「蛙泡、妻を娶る」という前書が付いている。虚子は大畠いとと結婚した。いとは碧梧桐の下宿先の娘で碧梧桐と婚約していた。その辺の成り行きや、この5か月後に子規へ宛てた虚子の詫び状の一部も本書で読むことが出来る。さらにその半年後に子規へ「大兄に追附き…大兄を乗越すべく期するであらう、…大兄百年の後は大兄の後継として恥ぢないやうにならう」と虚子の心境の変化を感じさせる決意を綴っている。

「**遠山に日の当りたる枯野かな**」1900（明治33）年作。虚子の代表句の一つと言っても過言でない名句である。虚子自身もこの句を生涯愛し、生きる拠り所としていたそうだ。先の決意から3年後の作。著者は「26歳で生涯の代表作を得てしまったことは幸か不幸か。虚子においては幸であろう。その後、いかなる迷いが生じたとしても、立ち帰る原点が定まっているということ」と評する。実作者としての感慨のこもった言葉である。

子規の死

虚子は子規の母や妹らとともに子規の最期を看取った。「**子規逝くや十七日の月明に**」、1902（明治35）年9月17日、先に子規庵にいた碧梧桐から電話で呼ばれ、虚子がそばにいたが、子規の臨終に急ぎ「ホトトギス」の校正のため帰った碧梧桐に知らせようと外に出たときの句とのこと。碧梧桐とはこのように一緒にいることの多い間柄だったが、子規死後の主導権争いの緊張の中、碧梧桐の近作への違和感などから、徐々に距離を持つようになっていくことが語られる。

漱石の「猫」

「**ワガハイノカイミヨウモナキススキカナ**」

夏目漱石は子規と大学予備門の同級で親友になった。日清戦争に従軍し喀血した子規の療養のため、松山の自分の下宿に呼んだことにより、子規が催す句会にも顔を出していた。その後漱石の英国留学中に子規は亡くなる。不安定な精神状態を抱えて帰国した漱石に、虚子が短編を書くよう勧め、漱石は書いたものの題を「猫伝」にしようか、それとも書き出しの「吾輩は猫である」にしようか相談し、虚子が後者を取って決まり、結果『吾輩は猫である』は大評判となる。上の句は猫の死に対し虚子が送った電文そのままが俳句となっている。「実に上手く気の効いた愉快な句」と著者は語る。虚子自身も漱石から刺激を受け、小説家として立とうという初期の希望を再び燃やし、明治終りの3年間は数句しか残していないとあり、子規没後のあの決意はどこへ、と脳裏をかすめるが、まだまだ虚子の生涯はこのあとも長く広がりをもって続いていく。

明治時代のこれらの動向が俳人虚子の形成にいかに重要であったか、その一部を著者の詳細かつ重厚な考察に添ってご紹介した。本書は以下、大正、昭和・前期、小諸時代、昭和・後期へと虚子の句と人生を語り続けていくが、紙幅の都合もあり、以下簡略に概要をお示ししたいと思う。

芭蕉から虚子へ

「**年を以て巨人としたり歩み去る**」大正2年作。「俳句は芭蕉の文学である」という虚子の言葉に著者はもっとも共感するという。そしてこの句も『奥の細道』の冒頭「行き交ふ年もまた旅人なり」から来ているに違いないという。かつて著者が論じて評判となった「古池」の句についての「まだ冬のままの池」のなかで起きた春の生動（蛙）をとらえた句という解も、虚子の『虚子俳話』から想起したものだと、その恩恵を語る。

西欧への旅

虚子は昭和11年、船で西欧への旅に出かけている。ちょうどこの時の船上での写真が日本近代文学館にあり、掲載させて頂くことが出来た。完璧な洋装の横光利一と並ぶ虚子は羽織袴姿である。旅の4か月間も終始着物で通し、その後も洋服は一着も持たなかったという。西欧の人々の眼に虚子の着物姿はどのように映ったのだろうか。

渡仏の箱根丸船上にて　前列左より虚子、横光利一、後列左、上ノ畑楠窓（箱根丸機関長）、末女章子。昭和11年2月　日本近代文学館提供

「**フランスの女美し木の芽また**」、虚子の美女好みは国際的だった、と著者は語る。袴を畳んだりするお世話役として一緒に行ったのが、17歳の末女・章子さん、フランスではパリ滞在中の次男、作曲家の池内友次郎氏と会い、現地の人々といろいろな交流を結んでいる。

碧梧桐への追悼句

「**たとふれば独楽のはぢける如くなり**」

昭和12年、親友河東碧梧桐の逝去に際し寄せた追悼句。「碧梧桐とはよく親しみよく争ひたり」という前書が付いている。なぜ独楽か。著者は碧梧桐の句集にある「**虎の子の海嬴を汝が袂かな**」という句に、大事にしていたベイゴマをお前に取られてしまったという表向きの句意とその奥を推測する。結婚の顛末のことか。本書にはこんな興味深い考察が随所に登場する。

国家総動員法が成立したころから徐々に「ホトトギス」には中国戦線からの投句者が増えてくる。虚子は、戦地で過酷な状況にある人々の、その句の中へ入り込み、地獄の戦争をともに体験するがごとく、明日知れぬ限界状況にある句を選び続けている。著者は、選者虚子に対して、敵・味方といった時局的な価値観によらず、写実を重んじ、季

語の働きや句の完成度、類型・類句の排除を貫いている、とその姿勢を見据えている。

小諸時代

虚子夫妻は1944（昭和19）年9月、長野県小諸に疎開し、以後約3年を当地で過ごす。この間の記述は信州に生まれ現在も居住する著者にとって、同じ風土や自然、人間の体質をよく理解しているが上での力の籠った記述となる。

「**爛々と昼の星見え菌（きのこ）生え**」1947（昭和22）年、虚子が小諸を去る送別句会での詠。出句時は違う形だが、推敲される過程についても、また発表後の各俳人たちの賛否論や解釈も披露され、いかにこの句が現在に至るまで虚子の句の計り知れない魅力を秘め持つ句であるかということを示してくれる。

小諸から鎌倉に戻った74歳の虚子、以後の晩年にも数々の名句が生まれている。「**去年（こぞ）今年貫く棒の如きもの**」「**ゆらぎ見ゆ百の椿が三百に**」「**春の山屍（かばね）を埋めて空しかり**」等々、「**独り句の推敲をして遅き日を**」という亡くなる数日前に作った句に関する鑑賞も読み応えあるものだ。85年の生涯を閉じた巨人であった。

編集余話

「梟」の連載原稿を一本にするために著者はかなりの加筆や修正を施された。再編された原稿が小社に届いてからは、あまたの俳句の表記や制作年、引用文や史実の確認の必要が生じたが、国会図書館はコロナで休館、ようやく再開後も予約抽選で当選日のみ入館できる状況であった。また掲出句の索引作成にも小社なりの工夫をこらした。さらに校正時の著者による大幅な修正、加筆、削除もたびたびだったが、完成した本は著者の見識と新しい切り口で虚子をとらえているところが立ち上がり、ここに新たな優れた虚子論として世に出すことが出来たのではと感じている。

＊

（きくち　ようこ／紅書房代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『終わりなきタルコフスキー』●忍澤勉著

一九八七年に旧ソ連の映画監督、アンドレイ・タルコフスキーが五四歳の若さでパリで客死してから三五年の歳月が流れた。タルコフスキーは、中編を含めて生涯でわずか八本の作品しか残していない。しかしそのわずかな作品たちはあまりにも濃密であり、今でもわたしたちを魅了し続けてやまない。著者は言う。タルコフスキーは過去の人ではなく未来の人であり続ける、その作品群は古典にはなり得ず、いつまでも新しい問いを発し続けている、と。本書は、そのような問いへの、現時点における著者の答えであると言える。

「第一章 物語の深淵 隠された意図」で著者はまず、タルコフスキーのデビュー作『ローラーとバイオリン』から遺作の『サクリファイス』にいたる全作品について、物語を順を追って緻密に辿り、細部にまで周到に仕組まれた技巧と意図とを明らかにする。驚くべきは、作品の原作から製作、さらに内容にかかわる事実関係が徹底的に調べられていることである。例えば『惑星ソラリス』の原作、さらにはそのロシア語訳と日本語訳の発表と出版の経緯などの詳細は調べようとしない限り知り得ないものであり、読者にとってこれらの事実関係はタルコフスキー理解の基礎資料になるばかりではなく、多くの発見と再発見をもたらすと思われる。

「第二章 家族の投影 芸術的ポートレイトの深層」では、その作品群に色濃く反映されているタルコフスキーの家族関係とその歴史を、作品の細部と照応させていく。ここでも読者は、著者によって徹底的に調べられた事実関係の上に作品を見ていくことで、その作品の細部に映し出されたタルコフスキーの現実の家族の物語を見出すことになる。特にその父で詩人だったアルセーニーとタルコフスキーの関係は、その作品理解には欠かせないものである。

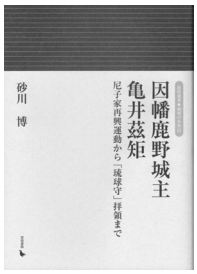
ところでタルコフスキーの映画を初めて見たとき、おそらく多くの人は、その映画の中に変容自在に現れる四大物質、中でも火や水に、いったいどんな意味があるのかと熱烈に知りたくなるに違いない。それらは何かの象徴なのか、あるいはタルコフスキー本人が自己韜晦するようにしばしば言っていたごとく、単に彼の記憶にある思い出の映像に過ぎないのだろうか…頻繁に現れる馬や犬についても同様な思いに駆られる。そのような読者にとって「第三章 モチーフの躍動 物語を紡ぐ事物」が大いに参考になる。ここでは、作品内の事物や動物がどのように描かれているかに重点が置かれているが、なかに、著者独自の解釈も披瀝されている。例えば、『ストーカー』や『ノスタルジア』で不思議な現れ方をする〈犬〉について、著者は異界への案内役と解釈し、また、どの作品にも頻繁に登場する〈唇に傷のある子どもたち〉について、生命の希薄さを表していると思われる、と述べている。そして、意外なところでは例えば『ノスタルジア』の主人公のような、男たちの〈部分白髪〉にもただの偶然ではない意味があるという。

「第四章 核時代への視線 内包された予言」はここまでと異なり、野心的な作品理解になっている。著者は、東日本大震災と福島第一原発の事故の後の現実を捉えて「新しい核の時代」と呼び、このわたしたちの時代の現実からタルコフスキーの各作品に戦争や核がどう描かれ、またどのように予言的に映し込まれているか、を見ていくのである。

著者は本書のところどころで実に意外な解釈をしてみせるが、もとよりタルコフスキー自身〈どんな観客にも同意することができる。映画は様々な解釈がなされるように、特別に作られたのだ…〉と言っている。読書が、本書における著者の解釈に反発しても同意しても、それは終わりなき作品世界にさらに一歩踏み込むための契機となる。それが著者の意図するところである。（N）

◆ 2600円・四六判・438頁・**寿郎社**・北海道・202201刊・ISBN9784909281401

『因幡鹿野城主　亀井茲矩 －尼子家再興運動から「琉球守」拝領まで』●砂川博著



本書は『平家物語』及び『一遍聖絵』などの研究で知られる碩学が戦国史研究に新たに挑んだ意欲作。主人公である亀井茲矩の１２歳年長の義兄（義父でもある）は言わずと知れた山中鹿介幸盛（両者の室が姉妹）。尼子氏再興を誓う孤高の武将として歴史ファンから絶大な支持がある。幸盛亡き後その遺志を引き継ぎ再興運動に身を挺す。その活動期間は天正年間の前半の１０年。本書はその足跡を追う。

著者は同時代史料である古文書以外にも家譜や軍記など信憑性に些か問題のある文献をも駆使、「一定の史実のうえに虚構の網が被されている」との見解を踏まえ、慎重かつ大胆に検証していく。天正６年（１５７８）籠城中の幸盛らに茲矩が脱出を促す上月城潜入談は家譜の編者が茲矩の「才知と胆力・武勇」を称揚するための虚構であると結論づける（第３章）。古典作品に精通する著者ならではの体質なのか、語彙の意味についても吟味を怠らない。

例えば、史料上の「数輩」は「数人の者」ではなく「多数」を意味する可能性を示唆。「留守居」茲矩の鹿野城から脱走した鹿野氏らの人数から茲矩が受けた衝撃度を推し量る。茲矩の鹿野城留守居任命や鹿野氏の脱走行為から、著者は武者の「遺恨・復仇」の念を羽柴秀吉が利用したという、人間の心理状態にまで踏み込んで大胆に推量する（第６章）。天正１０年（１５８２）「琉球守」（自称？）を秀吉が追認した。茲矩が秀吉にいかに厚遇されていたかの証拠だという。（Ｉ）

◆ 3900円・Ａ５判・252頁・**岩田書院**・東京・202201刊・ISBN9784866021331

『ウイグルからの手紙』●ＫＥＮＪＩＹＡＧＩ著

中国北西部に位置する新疆ウイグル自治区には独自の言語や文化を持つウイグル人が暮らしています。かねてより東方から漢民族の資本や人々が多く流れ込んできて、中国政府による漢民族への同化政策が進んでいましたが、近年それは急激に苛烈さを増し、ウイグル人の強制収容所への連行・強制労働や拷問・強制的な不妊手術が行われ、多くの犠牲者も出ていることが明らかになってきています。本書は在日ウイグル人の人々を中心に編まれ、彼らの歴史に触れながら、そうした弾圧を告発します。ウイグル人への弾圧は上記にとどまらず、日常的な脅迫や監視にも及び、アリババやファーウェイといった企業は監視技術を中国政府に提供しているといわれます。またオーストラリアのシンクタンクが調べた、強制労働者が働かされている工場と関わりを持つ企業の中には、複数の日本の大企業も名を連ねています。私たちの日常の暮らしも必ずしもウイグル人弾圧と無関係ではいられません。本書にはウイグル人への弾圧が激化する前1990年前後に撮られた当地の人々の写真も収められるとともに、別刷りのポストカードとしても付属しています。写真を撮ってくれとばかりにポーズをとる男たちや仕事をする少年、あるいは微笑む老人など、そこには当たり前のようにあった日常を生きるウイグルの人々が記録されています。とりわけカメラに向けられた子供たちの笑顔が印象的ですが、彼らの今を思うと心が痛みます。（副隊長）

◆ 1200円・220mm × 160mm判・106頁・ＳＰＲＯＵＴＳ　ＶＩＳＩＯＮ・静岡・202201刊・ISBN9784991206405

『輝ける闇の異端児　アルチュール・ランボー』●井本元義著

15歳で詩作を始め、若き天才詩人として十代にしてすでにパリ詩壇に熱狂的に迎えられたアルチュール・ランボー。20歳で詩を放棄するまでのわずか数年の間に「酔いどれ船」や「地獄の季節」などを発表し、多大なインパクトを与える。家出と放浪を繰り返し、波乱に満ちた短い生涯を駆け抜けたランボーは今もなお人々を魅了してやまない。著者もそんなランボーに魅せられ、パリ、シャルルビル、ロッシュ村と彼の足跡をたどり、ゆかりのホテルに泊まり、ランボーガイドのようなエッセイを出版しているが、本書はそのランボーシリーズの第２弾及び先に出版されていた小説「ロッシュ村幻影」を没後130年にあたり加筆し修正、新たに掌編を加えたもの。

ポール・ヴェルレーヌとのいざこざの後、体調も思わしくない中、故郷ロッシュに戻り、数々の出来事を回想する。パリでコミューン兵士になった時、窮地を救ってくれた亡き父フレデリックの面影。右脚を失ってから亡くなるまでの心象風景。さらに“もう一人のランボー”として、もしも生き続けていたらという仮定で物語が展開される。

また、ランボー好きの“僕”が偶然入った喫茶店で目にしたメニューがきっかけでランボーが住んでいたハラル（エチオピア）を訪れて出会った人々や遭遇する事件も幻想に溢れている。なぜ彼は書くことを止めたのか。彼は詩そのものを生きたのか。問い続ける著者の熱い思いが伝わってくる。（Y）

◆ 1500円・四六判・221頁・**書肆侃侃房**・福岡・202201刊・ISBN9784863855045

『つながる沖縄近現代史 －沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム』●前田勇樹ほか著

沖縄近現代史については、多くのことが語られている。たが、関心の細分化や専門化が進み、全体を見渡せるような研究は心もとない状況にあるばかりか、最も重要なキーワードの「琉球処分」ですら、琉球王国が廃滅し沖縄県が設置される1870年代から言われてきているにもかかわらず、多様な定義や歴史認識があり、今もって共通理解に到っていないという。

こうした問題意識の下に、琉球沖縄史、女性史、音楽史、農村社会経済史、沖縄・南島群島、移民、社会学、社会科・平和教育、東アジア国際関係史、欧米現代史、図書館職員、自治体職員、出版編集者など様々な分野の若手研究者と職業人25名が集い、現代の沖縄社会が抱える課題と向き合う、新しいスタイルの入門書として企画された。

欧米列強の東アジア進出という世界史的な動きの中でペリーと結ばれた琉米修好条約を起点に、明治政府、清国との複雑な関係の再編、近代の糖業、戦後の基地、現在の観光と特定産業に偏って依存する経済構造、戦争を挟んで翻弄された二度の日本化、沖縄戦に潜むエスニック・マイノリティへの差別、復帰運動が抱え込む亀裂、開発の時代における生活と意識の変容、沖縄ブーム到来の一方で長く棚上げされてきた基地問題の噴出まで、15のテーマと20のトピカルなコラムからなり、本文上段に適宜フラグ（コメント）を付し、相互に関連付けている。日本復帰から50年、今それが何であったか問われている。（飯澤文夫）

◆2200円・A5判・231頁・**ボーダーインク**・沖縄・202111刊・ISBN9784899824169

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2022年2月1日～28日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Kappo** vol.116 2022年3月号 プレスアート編 298mm × 230mm 119頁 745円 プレスアート ［宮城］ 978-4-503-22530-6 22/02

◆**S－style** 03 vol.687 プレスアート編 298mm × 232mm 124頁 450円 プレスアート ［宮城］ 978-4-503-22542-9 22/02

◆**GREEN REPORT** 506 2022年2月号 廣瀬 仁編 A4 191頁 2546円 地域環境ネット ［埼玉］ 978-4-909864-38-3 22/02

◆**AXIS** Vol.216 2022年4月号 上條 昌宏編 297mm × 225mm 128頁 1636円 アクシス ［東京］ 978-4-503-22544-3 22/04

◆**Be!** 146号 No.175 今成 知美編 A5 109頁 870円 アスク・ヒューマン・ケア ［東京］ 978-4-909116-28-4 22/03

◆**地方史研究** 第415号 地方史研究協議会編 A5 152頁 1143円 岩田書院 ［東京］ 978-4-86602-865-1 22/02

◆**子どもと読書** 452号 2022年3・4月号 親子読書地域文庫全国連絡会編 A5 44頁 509円 親子読書地域文庫全国連絡会 ［東京］ 978-4-907376-54-3 22/02

◆**仏事** No.256 2022年1月号 奥村 昇編 A4 102頁 1500円 鎌倉新書 ［東京］ 978-4-503-22533-7 22/01

◆**仏事** No.257 2022年2月号 奥村 昇編 A4 80頁 1500円 鎌倉新書 ［東京］ 978-4-503-22534-4 22/02

◆**月刊住職** No.279 2022年2月号 矢澤 澄道編 A5 193頁 1364円 興山舎 ［東京］ 978-4-910408-07-1 22/02

◆**子どもの文化** No.607 2022年3月号 片岡 輝編 A5 47頁 290円 子どもの文化研究所 ［東京］ 978-4-503-22543-6 22/03

◆**セセデ** vol.732 2022年3月号 朝鮮青年社編 A4 47頁 482円 朝鮮青年社 ［東京］ 978-4-503-22539-9 22/03

◆**東京かわら版** No.584 2022年3月号 佐藤 友美編 203mm × 110mm 150頁 545円 東京かわら版 ［東京］ 978-4-910085-19-7 22/02

◆**俳句四季** No.535 2022年3月号 にしい 洋子編 松尾 正光編 B5 160頁 909円 東京四季出版 ［東京］ 978-4-503-22536-8 22/02

◆**みんなの図書館** No.539 2022年3月号 図書館問題研究会編 A5 72頁 750円 図書館問題研究会 ［東京］ 978-4-503-22535-1 22/02

◆**おりがみ** No.560 2022年4月号 日本折紙協会編 A4 51頁 728円 日本折紙協会 ［東京］ 978-4-86540-113-4 22/03

◆**海運** No.1133 2022年2月号 日本海運集会所編 A4 64頁 1200円 日本海運集会所 ［東京］ 978-4-503-22528-3 22/02

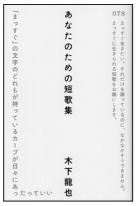
◆**Fuji Airways Gu**

売行良好書

期間：2022年2月15日～3月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『マーケットから生まれる１２ヵ月のイタリア料理　トリノ＆出雲＆東京』1800円・風鈴社　(2)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(3)『ボランティアと有償ボランティア』1800円・弦書房　(4)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(5)『「銀河鉄道の夜」の謎を解く』1800円・寿郎社　(6)『生き直す　免田栄という軌跡』2000円・弦書房　(7)『ふぞろいなキューリと地上の卵』1500円・寿郎社　(8)『日光山秘話』5000円・随想舎　(9)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(10)『とうさんかあさん』1400円・石風社　(11)『ユダヤ人を救ったドイツ人』3200円・鴎出版　(12)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(13)『ゾンビハムスターねずこ』1400円・リーブル出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『東京かわら版　Ｎｏ．５８４　２０２２年３月号』545円・東京かわら版　(2)『本の雑誌 Ｎｏ．４６６ ２０２２年４月号』700円・本の雑誌社　(3)『老人ホームで死ぬほどモテたい』1700円・書肆侃侃房　(4)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(5)『イマジナシオン』1700円・書肆侃侃房　(6)『ねむらない樹　ｖｏｌ．８』1500円・書肆侃侃房　(7)『音楽』1800円・ナナロク社　(8)『パズル通信ニコリ Ｖｏｌ．１７８』1000円・ニコリ　(9)『とりとめなく庭が』1400円・ナナロク社　(10)『天才による凡人のための短歌教室』1200円・ナナロク社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『老人ホームで死ぬほどモテたい』1700円・書肆侃侃房　(2)『日本海の拡大と伊豆弧の衝突』1000円・有隣堂　(3)『不謹慎な旅』2000円・弦書房　(4)『終わりなきタルコフスキー』2600円・寿郎社　(5)『千夜曳獏』1800円・青磁社　(6)『地域統合の多様と複合』3600円・桂書房　(7)『私がヤングケアラーだったころ』1200円・みずのわ出版　(8)『カメの家庭医学百科』5000円・アートヴィレッジ　(9)『国指定重要文化財　河本家の歴史と家屋のすべて』1636円・今井出版　(10)『鎌倉武士と横浜』1000円・有隣堂

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼この一か月で世界の情勢は一変してしまいました。今回のロシアによるウクライナ侵略を受けて、ながらく品切だった関連書籍が緊急増刷される、というケースが多々発生しているようですが、弊社取引先の成文社刊で、しばらく品切だった『**ユーラシア主義とは何か**』（**浜由樹子著**）もまたこの３月に重版されることが決まったとのことです。ISBN978-4-915730-78-8 四六判上製 本文縦組 304頁本体3000円。内容は以下の通りです。

「ロシアはヨーロッパでもアジアでもないユーラシアである。ソ連邦崩壊後にロシア内外で注目を集めたこの主張は、1920年代のロシア人亡命者の中から生まれた思想潮流に源を発している。その歴史的起源を、創始者である二人の人物に即して解明し、戦間期国際関係史の中への位置づけを図る。」（成文社サイト紹介文より）。以下目次より抜粋いたします。

【ユーラシア主義の研究史 / ロシア思想史 / ロシア人亡命者を対象とする研究 / クレムリノロジー的イデオロギー研究 / Ｎ・Ｓ・トルベツコイのユーラシア主義 / 西欧文明への批判 / 自己認識の問題 / 世界におけるロシアの役割 / 政治体制論とソ連観の変化 / Ｐ・Ｎ・サヴィツキーのユーラシア主義 /「ユーラシア」の地理的範囲とその特質 /「ユーラシア」の文明論的理解 / 地政学的論考 / 政治経済体制論 / ユーラシア主義への同時代の反響 / 亡命知識人による批判 / ソ連国内での反応 / ウクライナ知識人による批判 / イギリス知識人の期待 / 日本での受容】

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方･小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき､hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。